



対談

〔株編集工学研究所所長〕

Matsuoka Seigou

松岡正剛

池永寛明

〔大阪ガス機エネルギー文化研究所所長〕

Kenaga Hiroaki

日本的な価値を 取り戻し、再起動へ

——ルネッセ特集にあたって

日本的な価値は、古来、我々の生活文化の基盤であった都市に埋め込まれている。連続特集企画「ルネッセ (Renesse)」では、古今東西の情報から日本を日本ならしめる編集法を研究してきた松岡正剛氏をスーパー・アドバイザーに迎え、日本的な「本質」を再起動させ、それを現代・未来につなげるべく道筋を縦横無尽に提示する。

栗林成城=撮影

都市に埋め込まれた 本質を掘り起こし、再起動へ

池永 情報誌『CEL』は創刊30周年を迎え、今号から3号を、「ルネッセ(Renesse)」をテーマに日本のこれからの考えていきます。「ルネッセ(再起動)」とは、ラテン語の「再び(ren)」と「実在する(esse)」を組み合わせた造語です。

地域社会に関わるなかで感じることがあります。江戸時代以来「ないものからつくりつづける」東京に対して、明治以来「なくしたことを隠しつづける」大阪という地域構造の課題です。

さらに日本は少子高齢が進み、社会・産業構造も大きく変化しているにもかかわらず、価値観や制度や仕組みが従来のものであるため、諸相に適合不全が顕れています。

私たちの生活文化の基盤「都市」にある本質を過去より掘り起こし、現代・未来へとつないでいくことができないだろうか。古来より都市が形成された近畿圏には日本的なる「本質」が育まれ存在しているはずなのに忘却している。この本質を「ルネッセ(再起動)」させることで、都市に新たな価値を創造できないかと考えています。

その先駆けとして、「近畿における消費行動の分析」(44頁)を行いました。近畿圏の動きを現在の行政区分と旧令制国区分で比べてみると、大阪府より摂津国と捉えた方が地域の人の行動や消費構造が鮮明になりました。「ルネッセ」的に考えていくことが必要ではないかと考えています。

松岡 その視点はおもしろいですね。先日、関西のある銀行関係者と話をする機会がありました。同じ問題意識を感じました。

池永 新しいものに対する受容性が低いという実

態も浮き彫りとなり、これも近畿圏の地盤沈下の一因かもしれません。首都圏や中部圏に比べてスマホやeコマースの利用が遅れています。かつてはどこよりも新たなものを受け入れ、スピーディに自分のものにしていたはずですが。阪神・淡路大震災を体験しているにもかかわらず地震保険の加入率が低い。未来を考えるよりも短期的な行動をとるという傾向が強い。

松岡 それを聞いて思い浮かぶのは、江戸後期の儒学者海保青陵の『稽古談』にある「凡大坂ノ利ニ精シキハ、浅キコトニアラズ」という言葉です。利に精しいのはつまらないことではないし、簡単なことでもないという意味ですが、いまの大阪は「利に対する編集力」が弱くなっているのではないかと。また大阪の枠を外れると、すぐにあきらめてしまう。どこで間違ってしまったのでしょうか。

池永 情報と情報を組み合わせ、新たなものを創り出す力が弱ってきているのではないのでしょうか。今、インバウンドが伸び、関西空港から大阪に入り京都、奈良に移動される。かつての「天下の台所」の水路ネットワーク構造とよく似ています。しかし、この現象の本質を踏まえなければ、一過性で終わってしまう。

松岡 いろいろな事象、チャンスの兆しは起こっているのに、長続きしないのはなぜかという問題です。その理由のひとつに、大阪では好きなこと、自由なことができるはずだという錯覚を日本中がしていたかもしれません。インバウンドも、東京であれば国が予算をつけて観光客が増えるように計画したでしょう。ところが、大阪は任せていても大丈夫だろうと思ってしまう。

大阪らしい先駆性を維持できていないのは、パトロネージュの文化が切れてしまったことも原因

でしょう。過去には豪商が懐徳堂や適塾をつくり、日本中の若者に門戸を開き人づくりをした。とはいっても、余裕がないと文化資本は生み出せないし、シードマネーもつくれません。大阪にそれができないならば、第三の方法を見出せばいい。やんちゃなもの、ハイブリッドなものなど、他では複合しないような組み合わせを大阪で起こせばいい。近松門左衛門の「曾根崎心中」のように、心中事件と人形浄瑠璃を組み合わせる発想は大阪でしかありえなかった。かつてあったそういうものを取り戻す必要があるでしょうね。

新たな異なる情報を編集し、 モデル化してきた大阪

池永 先日、「大阪くらしの今昔館」で、外国の方を招いて上方文化体験プログラムを行いました(36頁)。自国との違いに気づく一方、自国との共通項を見たという外国人が多く、まさに文化の本質で「ルネッセ」の原点になると考えています。

一方、私たちが自らの文化を説明できなくなってきたということにも大阪の弱体化を感じています。松岡 それは大阪だけではなく、日本全体が抱える問題でもある。日本人が日本文化を説明できていないのです。まず大阪が率先して、上方の文化経済や歴史を説明していくべきです。

なぜかといえば、かつての都としての京都、貿易港としての神戸、古都としての奈良、壬申の乱を抱えた滋賀、こういった地理・時間軸のなかで商都大阪が大きな役割を果たしてきました。海保青陵のいう「利」は、いわば実学です。そこを实地でやれたのは、大阪だけでした。最先端の外からの情報を編集し、大阪モデルをつくり先頭を切ることができたのは大阪だったのです。



自身が所長を務める編集工学研究所内の松岡氏。所内には日本文化に関わる書物が百科全書的に網羅されている。

古代に難波京があり、遣唐使がそこから出て文化の入り口となり、竹内街道を越え飛鳥京へとつながるパイプがあった。中世では渡辺党が上町台地をつくりあげた。大阪は上町台地にできた街だから、まず上町台地型の摂津・船場文化と畿内の各都市文化、歴史の違いを説明できなければいけません。

私は懷徳堂が好きなのですが、5人の豪商がつくりあげてからの三宅石庵時代は素晴らしいけれど、

ど、中井竹山時代に権力にへつらうようなことが起きた。現代も、おもしろいことをやっても、後には評判が悪くなったり、余所に出ていたりする。こうなってしまうことを、もう一度考え直さなければいけません。

池永 私は、大阪が「大阪のためのものだ」と思った瞬間から大阪が弱体化したのではないかと、いう仮説を立てています。

松岡 成功した早い段階で編集力をきかせ、モデ



過去から現在そして未来まで、日本や近畿の文化をめぐる対談は2時間に及んだ。

ル化を行い、外に展開するところまでができれば、大阪も成功していたのではないのでしょうか。たとえば吉本興業は、じつくりと大阪で吉本モデルをつくりあげてから全国に展開して成功しました。芸人を続々と、全国のメディアや劇場にぶつけて、日本全体のタレントにしていく。大阪発のものは吉本以外にもありますが、モデル化ができていない段階で全国展開しようとしたのでうまくいかなかった。せつかくできつつあるものを仕上げず手を抜いて、「利に対する編集力」を弱くさせている。大阪の企業は、外に出す前に、「大阪モデルにしてから外に展開する」という大阪合意のようなものをつくった方がいい。

産業構造の変化と上方文化の衰退

池永 編集し、モデル化することが弱くなったのは、大阪市内に大学がなくなったことも大きいと考えています。

松岡 それはどうしてだったのでしょうか？

池永 高度経済成長時代、大阪市域での工場増加に伴う人口増加が問題になり「工場等制限法」ができたのですが、それは工場だけでなく大学の施設・増設をも制限するものでした。そして大阪市内に大学が減った。学生が減り学びの場がなくなり、ビジネスだけの場になってしまった。

松岡 商都大阪の失敗ですね。イギリスが、ランカスターやバーミンガムなどの工業都市の大学を大事にしてきたのとは違う。イタリアのミラノやローマも、アルマーニに見られるファッション産業やチネチッタに見られる映画産業をつくりあげてきたのに、大阪の現状は非常に由々しきことです。メディアの華も咲かなかった。

松岡 小林一三は阪急をつくらなければ、ほかに挿し木してハイブリッドにするのではなく、小林文化だけが残ったという感じですね。アメリカ村と小林文化が合体するなんていうことにはならなかった。

池永 本来の上方モデルであれば、外国や日本の優秀な若者を集め、増城にして、新たなものを生み出したはずですが。

松岡 江戸の研究者たちと上方のことを話すと、惜しむことが三つあります。まず木村兼葭堂がアジア文化をメディアとして取り込んで、知の一大センターにしたのに、それを引き継ぐものが生まれなかったこと。次に『雨月物語』を書いた上田秋成のように自由に編集できる上方モデルが生まれたのに広がらなかったこと。さらに、近松門左衛門と井原西鶴という編集力と早さの両者を語れる人がいないこと。

池永 天下の台所をつくりあげたトランスファァー文化を失い、明治に入り大きな産業資本、分業モデルに呑み込まれ、ものづくりと商いの強みであったデザイン力が弱まってしまった。

松岡 商業文化を経済にできなかったのですね。大阪は大きくなりすぎ、コストのかかる大企業・産業構造に巻き込まれ、大阪商人の本質や付加価値を生み出す力が消えてしまった。大阪府や市を小さくすることはできないので、モデル化やプロジェクト化を図り小さく分け、機能性の高いものに切り替えていけばいいはずですが。

日本的な文化、精神性を引き継ぎ、アジアの拠点に

松岡 私は、大阪はもつと「煎茶」に賭ければ勝てたと思っています。抹茶ではなく、秋成も兼葭

池永 水上物流から鉄道物流への移行につづき、明治末の電話開通も関係する。電信技術の進展に伴う銀行決済システムの変化などで大阪に本店をおく必然性がなくなった。そのときに大阪としての情報の流通網の組み替えができなかった。

松岡 やはり、才能とかキャパシティといったソフト面、それから情報という目に見えないものに対して、「利」とは何か、型にするにはどうしたらいいのかと考えるところが甘かったのでしょうか。

それでも阪急文化圏のようなものをつくりあげることができました。なぜそういうものをもつとつくれなかったのでしょうか？

池永 時代背景として、「大正時代」であったことが挙げられます。関東大震災があり、東京の資本が大阪に移り、東京の代替機能も取り込み「大正時代」として伸びました。が、上方の本質である「トランスファァー文化」とは違う産業システムがつくりあげられたのではないのでしょうか。



本の茶室に見立てられた編集工学研究所の玄関口。床の間がしつらえられ、素木づくりの本棚には古今東西の全集が設置されている。

堂も好きだった煎茶文化ですね。抹茶文化がつくりあげたしつらえ、ふるまい、おもてなしに對して、一杯一銭のやり取りを広げてほしかった。

く変わった。松岡 上方文化には江戸の分節力にはない「間」があるんです。それから、女性文化も大切です。『夫婦善哉』のような女性がしつかりした作品もあれば、かつてマヒナスターズが歌っていたような男性すら女性的になってしまふ文化がありました。

池永 住文化でいえば、京都と外観は似ています。大阪らしい実利的、機能的な商人文化が障子や掛け軸にも表れています。大正・昭和初期の住宅には江戸以来の文化が残っていて、外国人の方が「スマート」と感じています。

池永 女性文化が花開かないのは、女性の働き場が少ないということもあります。東京一極集中になってしまい、大阪で働きたいという女性はいらぬ、活躍する場が少ない、不適合が起きてしまっています。

池永 1960年代に、心齋橋の百貨店が「おいでやす」という挨拶言葉を「いらっしやいませ」に変えたことが、ターニングポイントだったと言われています。この100年で大阪の言葉は大きく

池永 観光客が来る街づくりではなく、アイコンとア

池永 1960年代に、心齋橋の百貨店が「おいでやす」という挨拶言葉を「いらっしやいませ」に変えたことが、ターニングポイントだったと言われています。この100年で大阪の言葉は大きく

池永 観光客が来る街づくりではなく、アイコンとア

松岡 決して大阪だけがダメなのではなく、日本全体がダメだから、大阪はチャンスと考えるべきです。

松岡 よい案だと思います。「場・交・耕」でトランスミッションをどうきかせ、どう本質を再起動できるかというモデルをつくりあげられたらいいですね。

「場・交・耕」を切り口に日本を捉え直す

松岡 私はかねてから、川を主体に文化をつくることができなにかと考えています。川は区画を越えていきますからね。たとえば淀川はどうでしょう？

池永 人口構造、技術、インバウンドなど劇的な変化が起こりつあり、都市や都市文化を豊かにするチャンスです。松岡さんの編集工学の基本「守・破・離」の「守」に、「型」は思ったよりも自由だ」という言葉があったのが印象的でした。その方法論でルネッセを進めていきたいと思っています。

池永 淀川は、モノの交易・人と情報の交流の場でした。天下の台所をつくりあげたのは水路ネットワークです。海と船上輸送にて外とつながり、

池永 期待しています。



研究所内には「守・破・離」の提灯が吊されている。基本の型を変幻自在に応用するための思考法だ。



松岡正剛
まつおか・せいこう

編集工学研究所所長、イシス編集学校校長。1944年、京都府生まれ。71年働工作舎設立、総合雑誌『遊』を創刊。87年編集工学研究所を設立。以降、情報文化と日本文化を重ねる研究開発プロジェクトに従事。2000年インターネット上にイシス編集学校を開設し、ブックナビゲーション「千夜千冊」連載を開始。『知の編集工学』『知の編集術』『多読術』『日本という方法』『松岡正剛千夜千冊』(全7巻)など著書多数。



池水寛明
いけなが・ひろあき

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所所長。1959年、大阪市生まれ。82年大阪ガス入社後、天然ガス転換部にて人事勤務、営業部門にてマーケティングに携わる。日本ガス協会にて企画部長として、エネルギー・環境制度設計対応を担務。大阪ガス(株)後、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年より現職。

ルネッセとは—Renesse (再び [ren] × 実在する [esse])

日本は新たな情報や技術を外より収集し受け入れ、過去と現在を融合させ、価値をアップデートしてきた。

さらに「守」「破」「離」というプロセスを経て日本を成熟させてきた。

しかしいつからか、かつてあった日本的なるものから新たなものにつくり替え、都市・地域を、価値観を変えてしまった。

分断された過去と現在とを、内と外とをつなぎなおし、都市・地域が持っていた「本質」を

ルネッセ (再起動 [Renesse]) させ、新たな価値をつくりあげていきたい。

●再現



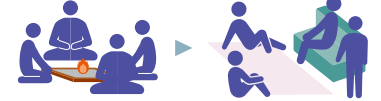
昔あったもの(囲炉裏)をそのままの形である囲炉裏として戻す

●再生 [アップデート]



囲炉裏空間を現代的な新たなものにアップデートして置き換える

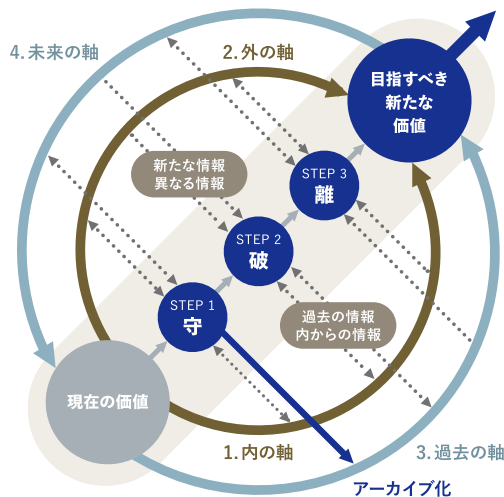
●再起動 [ルネッセ]



囲炉裏で過ごすということの「本質・意味」を読み解き、新たな情報や技術と融合・編集し、新たな価値を創造する

●「ルネッセ」の方法論

「内」×「外」と「過去」×「未来」という4つの軸を組み合わせ、「守」「破」「離」の3つのステップを踏んで、新たな価値を創造する。



守

昔あった住きもの、美しさもの、本質を発掘し、「型」「モデル」をつくり、見える化、アーカイブ化する。

破

過去より引き継がれるものに、新たなもの、外から学んだものを組み合わせて、価値のアップデートを図り、新たな「型」をつくる。

離

アップデートされた価値に、内×外、過去×未来という4つの軸を融合することで、新たな価値を創造する。

都市・地域・コミュニティに埋め込まれた価値は、一様ではなく相互に関連した複合的・多様なものである。

その複合的な本質に、「場」「交」「耕」の3つの視点から迫り、3号の有機的なつながりから、

本質を再び実在させるべく「ルネッセ (再起動)」戦略の全体像を提示する。

場

116号

都市を問い直す

日本は過去にあった日本的なるものを捨て、新たなまちづくりを進めてきた。過去の再現でも再生でもなく、かつて存在した「本質」を掘り起こし、新たなものと融合し、新たな価値を創造し、都市・地域を再起動する方法を考える。

交

117号

交流を問い直す

水路・陸路の結節点には物とともに人・情報が集まり、交流・変換がおこなわれた。内と外からの新たなもの・優れたものと、その場が持つ本質とを掛け合わせ、交えて流すという「トランスミッション」のあり方を考える。

耕

118号

文化を問い直す

文化はラテン語の「耕作し栽培する」が語源。種から作物を収穫するプロセスの円滑化×各ステップの最適化にて文化が生まれる。地域を耕作し、地域をよりよいものにし、未来に引き継ぐ文化のつくり方を考える。